

まった可能性が考えられ、京都平野内の他地域と同一歩調をとっている。黒田エノヲ遺跡は、京都平野の前期後葉から中期中葉の拠点集落であった下稗田遺跡の北西約一・五^{km}に位置し、その分村として位置づけられ、主として長峡川北岸の低台地を開拓したものであろう。しかし、後期後半には京都平野西部の拠点集落に成長し、長峡川の中・上流域を共同体の勢力下に置いたと考えられる。この共同体の中で、黒田地区とは別に長峡川南部にも有力な集団の存在が推定される。三島山遺跡内の上所田遺跡では後期の墓地から銅鏡二面が発見されていることから、箕田地区周辺に比較的大きな集落が営まれていたことが予想される。また、長川地区や久保地区にも共同体内の中小集団が存在していたであろう。これらの集団はその後古墳時代を通じて潜在力を高めていき、六世紀代から七世紀初頭には庄屋塚古墳・橘塚古墳・綾塚古墳に象徴されるように、京都平野の最も有力な集団の一つに成長を遂げるのである。

第三節 京築地域の弥生文化

京築地域では縄文時代後期から遺跡が増加するが、弥生時代に入ると水稻耕作に適した地理的な自然環境を舞台に、急激に開発が進み、それに伴って人口も飛躍的に増加した。京都平野や山国川流域などの広い生産地に恵まれた地域では、拠点とな

る大規模集落が営まれ、その周辺部でも比較的小規模な分村が広範囲に展開していた。

ここでは集落と墓地の変遷、更にそこで使われた各種の道具の地域的特徴を通して、弥生時代の京築地域の歴史を概観していくこととする(図2-57・表2-7)。

一 集落の変遷

前期の集落

弥生時代のもっとも古い土器である板付Ⅰ式土器が出土した京築地域の遺跡としては、行橋市長井遺跡と行橋市辻垣畠田・長通遺跡とがある。辻垣畠田・長通遺跡は祇川下流の沖積地に所在する遺跡で、標高約一一^mの低地に立地する。当遺跡は前期の中葉になると東西両側を溝で囲んだ東西約三五^m・南北約一八〇^mの低地性環濠集落を形成する。環濠の内側では四基の貯蔵穴が確認されている。確実な住居跡は発見されていないが、前期中葉から後葉にかけて食料等の財産を河川の氾濫による水害から守るために環濠が機能していたと考えられる。

苅田町葛川遺跡は京都平野北部で、高城山から南方に派生する丘陵上の突端部に立地し、標高は二〇^m前後である。第Ⅰ次調査区では弥生時代の前期と後期の集落関係の遺構が調査されており、前期では環濠集落を形成している(図2-58)。環濠は東西五七^m・南北四三^mの卵形の平面形を呈し、その構造は

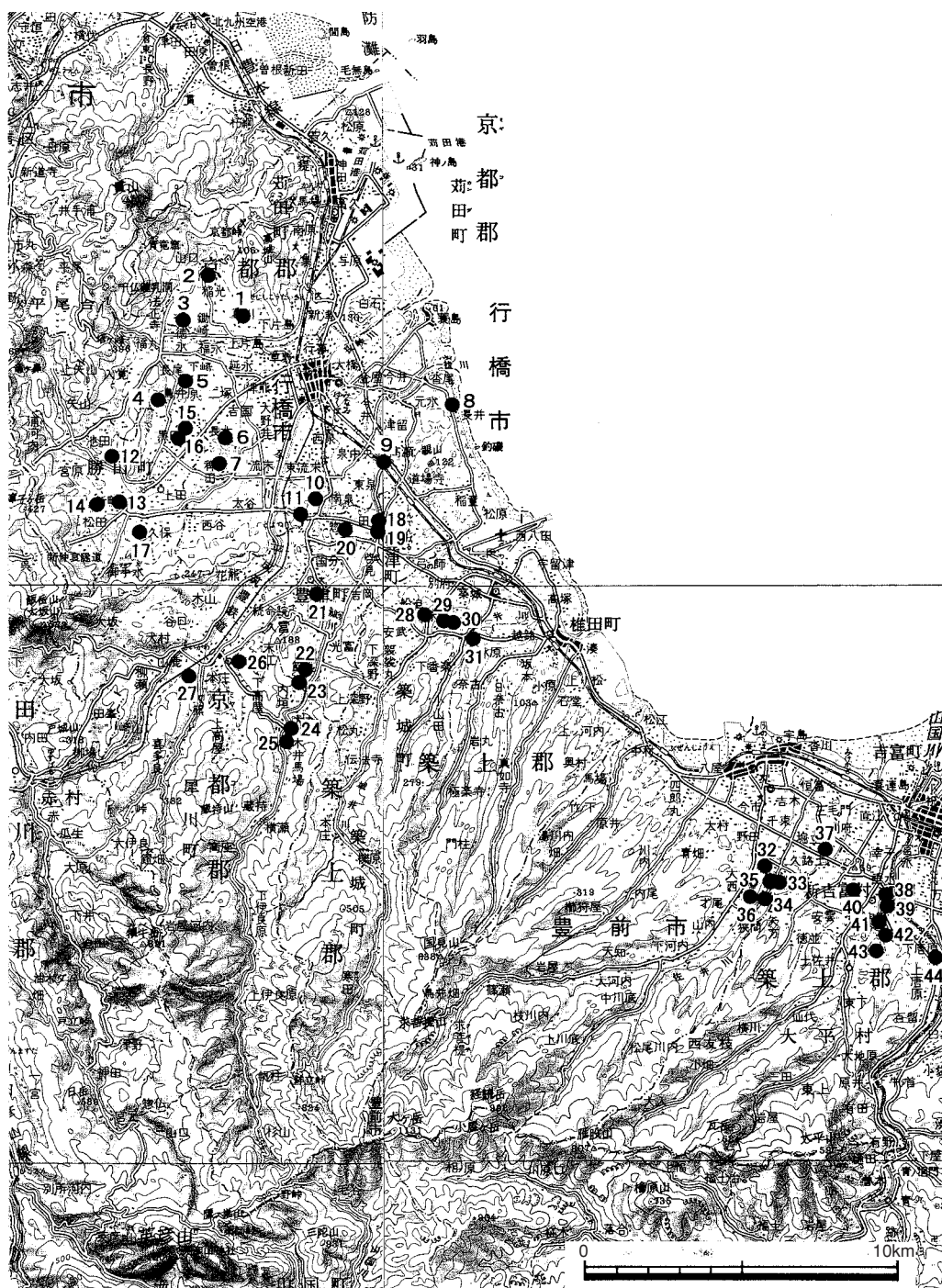


図2-57 京阪地域の弥生時代主要遺跡分布図

表2—7 京築地域の弥生時代の主要遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	所 在 地	時 期	備 考
1	葛 川 遺 跡	京都郡菟田町葛川	前期中葉～後期	環濠集落、住居跡6軒・貯蔵穴35基
2	谷 遺 跡	京都郡菟田町谷	後期～古墳時代初頭	住居跡10軒ほか
3	木ノ坪遺跡	京都郡菟田町法正寺	前期末～古墳時代前期	住居跡93軒・貯蔵穴15基ほか
4	入 覚 大 原 遺 跡	行橋市入覚		住居跡21軒・建物跡13棟ほか
5	下崎ヒガンデ遺跡	行橋市下崎	中期～古墳時代初頭	住居跡90以上・貯蔵穴38以上ほか
6	前 田 山 遺 跡	行橋市前田・検地	前期末～後期	貯蔵穴10基・埋葬施設246基ほか
7	下 稗 田 遺 跡	行橋市下稗田	前期後半～古墳時代初頭	住居跡243軒・埋葬施設283基ほか
8	長 井 遺 跡	行橋市長井	前期	墓地
9	辻垣畠田・長通遺跡	行橋市辻垣	前期	環濠集落、貯蔵穴4基
10	竹 並 遺 跡	行橋市竹並	前期末～後期初頭	住居跡19軒・埋葬施設19基ほか
11	矢 留 遺 跡	行橋市矢留	前期後半～古墳時代初頭	住居跡23軒ほか
12	小 長 川 遺 跡	京都郡勝山町長川	後期	方形周溝墓、銅鏡
13	上 所 田 遺 跡	京都郡勝山町箕田	中期～古墳時代	箱式石棺墓・石蓋土壙墓
14	亀 田 南 遺 跡	京都郡勝山町箕田	後期～古墳時代初頭	石蓋土壙墓5基・土壙墓2基
15	黒田エノヲ遺跡	京都郡勝山町黒田	前期～古墳時代初頭	住居跡・貯蔵穴ほか
16	黒田下原出口遺跡	京都郡勝山町黒田	後期	住居跡・建物跡
17	久保地区遺跡群	京都郡勝山町大久保	中期～後期	住居跡・貯蔵穴・建物跡ほか
18	徳永川ノ上遺跡	京都郡豊津町徳永	前期後半～古墳時代初頭	住居跡・貯蔵穴・墳丘墓ほか
19	神 手 遺 跡	京都郡豊津町徳永	前期後半～古墳時代初頭	住居跡11軒・埋葬施設12基ほか
20	豊前国府跡惣社地区	京都郡豊津町惣社	前期末～中期前半	住居跡・貯蔵穴・建物跡ほか
21	平 遺 跡	京都郡豊津町上坂	後期	石棺墓、銅鏡片
22	北 垣 古 墳 群	京都郡豊津町節丸	後期	方形周溝墓・埋葬施設12基
23	羽 熊 遺 跡	京都郡豊津町節丸	前期～中期	住居跡5軒・貯蔵穴100基
24	木井馬場井口遺跡	京都郡犀川町木井馬場	中期～後期	住居跡10軒・貯蔵穴約30基ほか
25	タ カ デ 遺 跡	京都郡犀川町木井馬場	前期中葉～後葉	住居跡1軒ほか
26	古川平原古墳群	京都郡犀川町古川	前期～中期	住居跡9軒・石棺墓19基ほか
27	大 熊 条 里 遺 跡	京都郡犀川町本庄	前期～中期	住居跡10軒・貯蔵穴50基ほか
28	安武・深田遺跡	築上郡築城町安武	中期後半～後期	住居跡9軒・埋葬施設4基ほか
29	赤幡森ヶ坪遺跡	築上郡築城町赤幡	後期	住居跡3軒
30	十 双 遺 跡	築上郡築城町赤幡・広末	後期～古墳時代前期	住居跡31軒ほか
31	広末・安永遺跡	築上郡築城町広末	中期	住居跡14軒・貯蔵穴ほか
32	塔田琵琶田遺跡	豊前市塔田	後期～古墳時代中期	住居跡30軒ほか
33	鬼 木 鉾 立 遺 跡	豊前市鬼木		銅矛
34	鬼木四反田遺跡	豊前市鬼木	中期～後期	住居跡36軒・貯蔵穴200基以上
35	久路土日中遺跡	豊前市久路土		住居跡5・建物跡13、ヤリガンナ
36	河原田塔田遺跡	豊前市河原田	中期	埋葬施設56基、銅戈
37	小 石 原 泉 遺 跡	豊前市六郎・小石原	後期後半～終末	住居跡3軒・高床倉庫2棟他
38	牛 頭 天 王 遺 跡	築上郡新吉富村垂水	中期前半	建物跡5棟・貯蔵穴2基他
39	中 桑 野 遺 跡	築上郡新吉富村垂水	前期末～中期中葉	住居跡6軒・貯蔵穴他
40	十 二 遺 跡	築上郡新吉富村宇野	後期～古墳時代前期	住居跡26軒・建物跡6棟他
41	下唐原桑野遺跡	築上郡大平村下唐原	中期	住居跡15軒・建物跡28棟他
42	大 塚 本 遺 跡	築上郡大平村下唐原	中期	墓地、方形周溝墓
43	穴ヶ葉山遺跡	築上郡大平村下唐原	後期	埋葬施設88基、銅鏡
44	唐原地区遺跡群	築上郡大平村下唐原	後期	環濠集落・墓地・水田跡、銅鏡

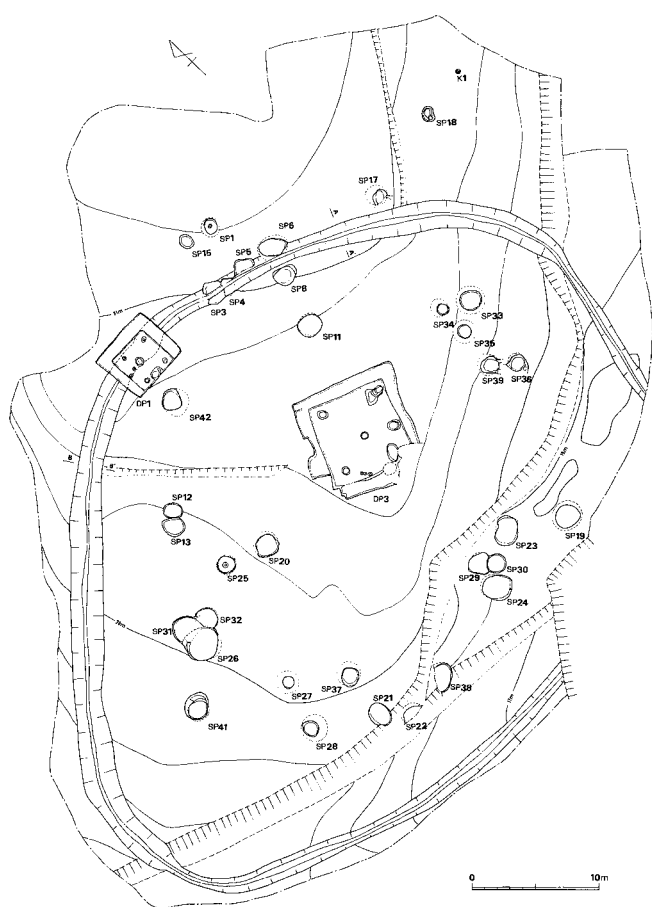


図2-58 葛川遺跡の環濠集落

断面がV字形で、幅が二・五メートル前後、深さは一・五メートル前後である。環濠の内外からは三五基の貯蔵穴が検出されたが、住居跡は存在しない。当初、前期の中葉に貯蔵穴群に保管した物の安全を確保するため周囲に環濠が掘削されたが、後葉になると環濠の必要性が失われ、貯蔵穴も環濠外に設置されるようになったもので、「弥生時代前期の私有権の変化を物語っている」と考えられている（酒井仁夫『葛川遺跡』荻田町文化財調査

報告書第3集、荻田町教育委員会、一九八四）。

豊津町神手遺跡は祓川の河岸段丘直上に立地し、辻垣畠田・長通遺跡の約三キロ上流に位置する。ここでも弥生時代前期後半から中期前半の環濠集落に伴う貯蔵穴群が発掘されている。環濠集落はごく一部しか調査されていないが、幅一・三メートル・六メートル・残存長五・五メートルの環濠で囲まれた内側から貯蔵穴が一九基検出されている。同時期の住居跡は環濠の内側から発見されていない。

行橋市下稗田遺跡は、京都平野中央部の標高二〇（三〇）メートル前後の台地上に位置する、行橋市・京都郡内で最大の弥生時代集落である。大型宅地造成に伴い稗田丘陵の南北約七〇（八〇）メートル・東西約五〇（六〇）メートル・面積約三三万平方メートルの範囲で、昭和五十四年から五十九年まで発掘調査が実施された。調査では弥生時代前期から後期に及ぶ長期間の集落と墓地が確認されている。調査された遺構の数は、弥生時代の前期から中期の集落で住居跡一七四軒・貯蔵穴一八八六基である。これら以外にも鉄などの製作途中の木製農耕具を保管した施設も発見されている。前期の集落は中葉の段階に建設され始め、後葉には最盛期を迎える。発掘された遺構の数は中葉・後葉の両時期を合わせて、住居跡九六軒・貯蔵穴九〇六基にのぼる。最盛期には四〇軒程度の住居



図2—59 下稗田遺跡Ⅰ地点Ⅱ期の遺構分布図

が密集していたと考えられ、一軒に平均五人が暮らしていたとすると、合計二〇〇人程度でムラが構成されていたと推定される。集落内での住居跡と貯蔵穴の分布状況を観察すると、三、七軒の住居跡とそれに付随する五〇〜一〇〇基の貯蔵穴とを単位とするグループが見出されており、この単位グループが「世帯共同体」として貯蔵穴を所有・管理していたと考えられている(図2—59)。この前期から中期の集落で出土した遺物は膨大な数にのぼり、土器が約一万八〇〇〇点、石器が二二八三点、土製品が二八六点、鉄器が一〇点で、ほかにも骨角器や貝製品がみられる。また、貯蔵穴の中からは食用に供した約三一万七〇〇〇個もの貝類の殻や、イノシシ・シカ・イヌ・ウサギ・ネズミ・トリ・ヘビ・スッポン・カエルなどの動物骨格が発見された。米以外にも海・山・川の豊かな産物を身近で獲得できたからこそ長期間にわたって集落が存続したのである。当遺跡内の谷部で発見された木製農耕具の保管施設は幅八メートル前後の小川の中に隣接して二基確認された。そのうちの一基は長さ一・八五メートル・幅一・五メートル・深さ〇・一五メートルで周囲を四本の矢板で囲んでいた。その内部からは平鍬の未完成品が出土したほか、周辺からは各種の鍬や石斧の柄・竪杵・小型臼・椀・案・建築部材などの木製の農耕具・脱穀具・生活用具が多量に発見された。同時に発見された土器から、この施設は当集落で最も古い前期の中葉の時期であることが判明している。

下稗田遺跡のような拠点集落とは別に、前期には比較的短期間の分村的な小集落が平野の各地に営まれる。犀川町木井馬場井口遺跡は祓川中流東岸の河岸段丘上に立地し、標高は八四〇八八坪である。調査では前期から後期の竪穴住居跡一〇軒・貯蔵穴約三六基・甕棺墓一基と、古墳時代以降の掘立柱建物跡などが確認されている。これらの遺構のうち住居跡は中期のものが七軒、後期が三軒あり、貯蔵穴は前期後葉から作られている。当遺跡周辺では犀川町タカデ遺跡・豊津町羽熊遺跡でも同時期の集落が調査されていて、河川の中流域への集落の拡大が前期後葉ごろに盛んになったことがうかがわれる。また、当遺跡の住居跡は床面の中央に楕円形の平面形の土壙をもち、その両脇にピットを配置するいわゆる松菊里型であるが、このタイプの住居跡は前期に作られることが多く、中期まで残存した当遺跡の例は注目される。

豊津町羽熊遺跡は祓川中流西岸の標高一〇〇坪前後の丘陵上に立地し、周辺の水田との標高差は約三〇坪をはかる。調査では中期前葉から中葉の住居跡五軒と、前期後葉から中期前葉の貯蔵穴約七四基が確認されている。前期から中期の京都平野内の集落では、貯蔵穴は通常直径・深さとも二メートル前後の規模のものが多く、対して、当遺跡の貯蔵穴は直径一メートル未満のものが全体の約九二％の六八基に達する。貯蔵穴は一般的に米の一時的な保管施設と考えられているが、当遺跡の場合「ドングリな

どの堅果類のアク抜きに使用された」可能性が指摘されている（飛野博文『羽熊遺跡』福岡県文化財調査報告書第144集、福岡県教育委員会、二〇〇〇）。

前期の集落を構成する施設として住居跡・貯蔵穴・環濠などがある。京築地域における前期の住居跡は、基本的に平面形が円形の竪穴住居跡である。

京築地域では前期の前半代に属する確実な住居跡はまだ発見されていない。辻垣畠田・長通遺跡や葛川遺跡ではともに環濠の内側で食料の貯蔵穴が発見されているが、住居跡は見当たらない。これは人々の生活の場所と食料の保管場所が明確に区分されていたことを示すものである。この時期、食料の生産地である水田は水の確保が容易な河川の氾濫原や沖積地に設けられ、住居は水田に隣接する場所に営まれていたと考えられる。

葛川遺跡の場合、食料である米を保管する貯蔵穴を住居から離れた高燥地である丘陵上に設置したため、他の集団や野生動物から守る目的で断面がV字形の深い環濠がめぐらされたものである。また、辻垣畠田・長通遺跡の貯蔵穴は、河川の氾濫による水害から守るための環濠に囲まれているが、湿潤な土地に所在するため米の長期保存には適当ではなく、ドングリなどの堅果類を貯蔵した可能性が考えられる。

前期の後葉になると下稗田遺跡のような拠点集落が形成され始め、貯蔵穴はしだいに住居がある集落内に設けられるように

なる。これは水田経営の規模の拡大とともに大規模な共同作業が増加したことから、地域集団の結びつきが強くなり始めたことを示すとともに、水田から離れた十分な敷地を有する場所に住居が移動した結果である。

中期の集落

前期末から中期前半は京築地域では遺跡の数が最も増加する時期である。下稗田遺跡では引き続き広範囲に集落が展開していて、中期前葉から中葉にかけて住居跡七五軒・貯蔵穴五二五基が営まれる。

築城町広末・安永遺跡は城井川と小山田川に挟まれた標高三二メートル前後の台地上に立地し、隣接する安永遺跡と合わせると、中期前葉から中葉の住居跡一四軒と甕棺墓一基のほか多数の貯蔵穴が調査されている。この遺跡では特に大形の円形住居跡の存在が注目される。1号住居跡は床面の南北径が九・六メートルばかり、直径一〇メートル前後の同様の規模の住居跡がほかにも二軒確認されている。これらの住居跡は床面の中央部に炉が掘り込まれていることから通常の居住施設と考えられ、集落の中で核となる世帯の住居であろう。

豊津町豊前国府跡惣社地区は祓川中流西側の沖積地の奥にのびる標高二六メートルほどの微高地に立地する。ここでも中期前葉から中葉の時期の集落が調査されている(図2-60)。検出された遺構は住居跡一六軒・掘立柱建物跡一棟・貯蔵穴二二基と、甕棺墓や土壙墓四基である。この中で掘立柱建物跡(写真2-

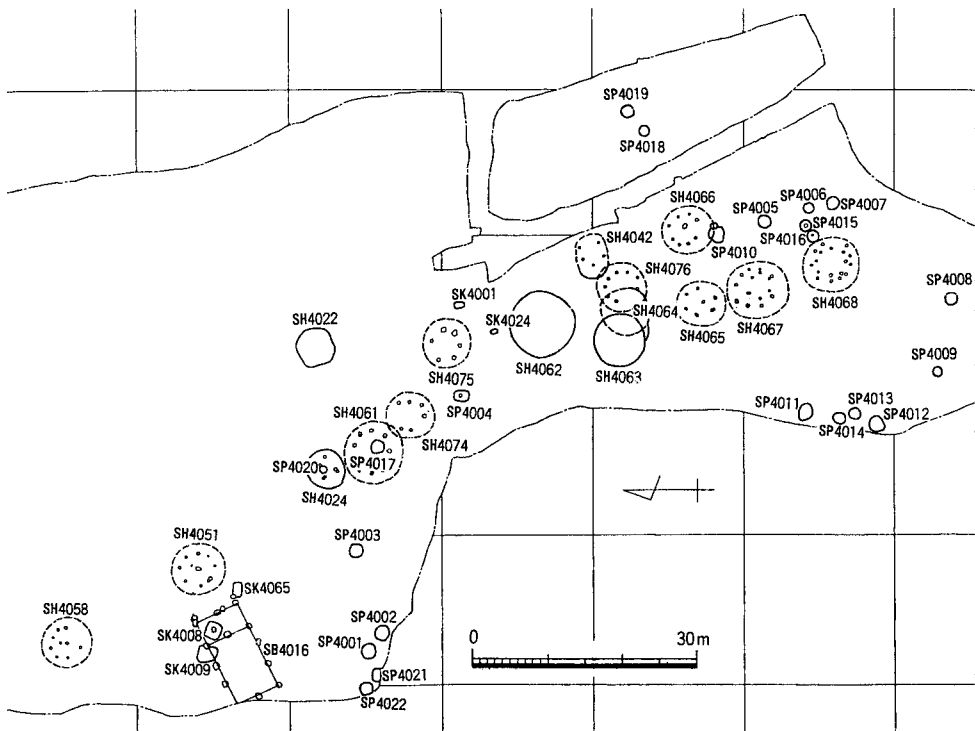


図2-60 豊前国府跡惣社地区の集落 (SHが住居跡、SBが建物跡、SPが貯蔵穴、SKが埋蔵施設)



写真 2—17 豊前国府跡惣社地区の掘立柱建物跡（豊津町教育委員会所蔵）

17) は東西の桁行四間（二・四^{メートル}）以上・梁間二間（六・〇^{メートル}）の規模をもち、柱穴は基本的に隅丸方形の平面形で一辺八五センチ前後をはかる。建物内部では東端の一間分に間仕切りがある。この建物は床面積が七〇平方^{メートル}を超える大型の建物であるにもかかわらず、柱痕跡が直径一五〜二〇センチと細いことから、高床倉庫や物見櫓的な建物ではなく、集落の集会所的な使用目的が考えられる。

新吉富村牛頭天王遺跡は山国川の河岸段丘上に立地し、標高二一^{メートル}前後である。当遺跡は中期前葉から中葉にかけての環濠集落の可能性がある遺跡で、掘立柱建物跡が八棟確認されている（図2—61）。環濠は周辺地形からみて二〇〇〜三〇〇^{メートル}の規模をもつと推定されている。建物跡は最大のもので長さ九・二^{メートル}・幅五・〇^{メートル}で、柱穴は長方形の平面形をなし、長さ二・〇^{メートル}をはかるものもある。これらの建物跡が倉庫か物見櫓か又はそれ以外の目的の建物か不明であるが、京築地域では弥生時代の古い時期の建物跡の一つである。当遺跡は中期において地域の拠点的な集落であったと考えられる。

大平村桑野遺跡は山国川と友枝川に挟まれた標高三〇^{メートル}ほどの段丘上に立地し、牛頭天王遺跡の南方約八〇〇^{メートル}に位置する。調査では中期の住居跡七軒・建物跡一二棟と貯蔵穴が確認されている。建物跡は大部分が中葉から後葉の高床倉庫であり、牛頭天王遺跡の建物群の後に続く時期のものである。建物

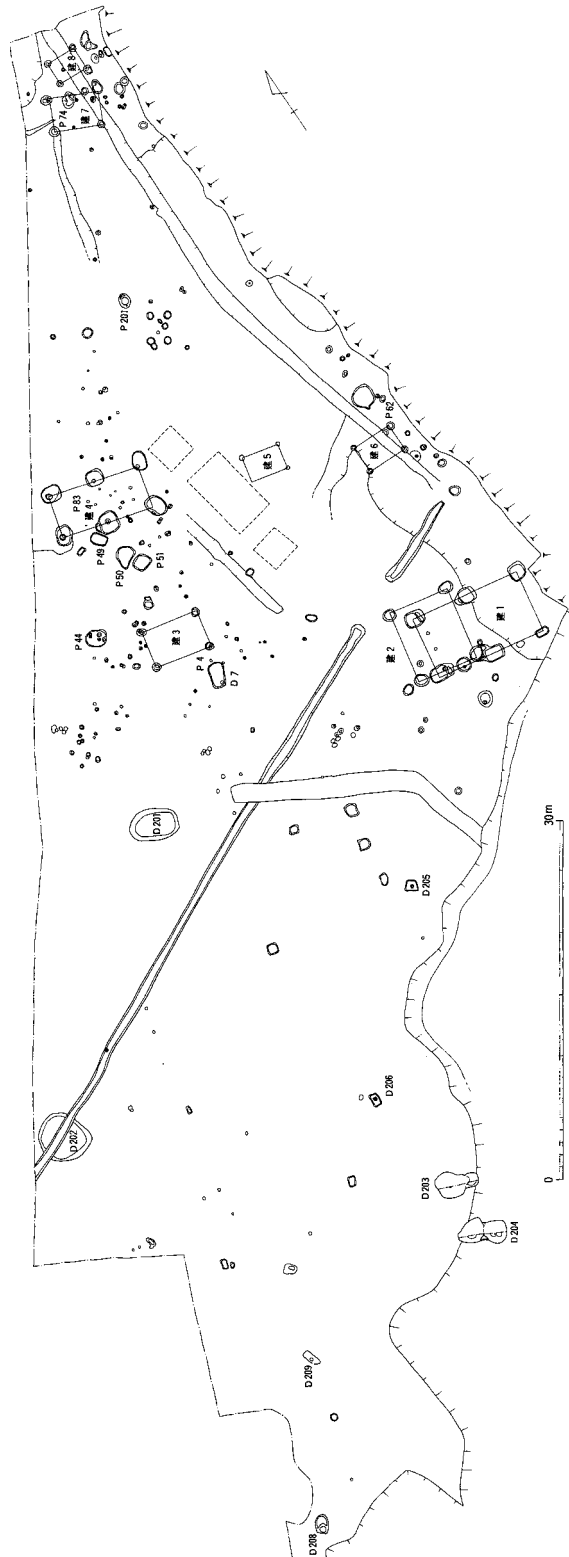


図2—61 牛頭天王遺跡全体図

跡は集落の中で東側に集中し、かつ建て替えられながらも規則的に配列されていることから、「ここに収納されたものは共同体の管理下にあったもの」と推測されている。一方で、四隅に柱穴を伴う土壇が二基検出されているが、これは「高床式建物跡に保管するまでもないようなものを入れる貯蔵穴」であり、管理が家族レベルで行われていたと考えられている（『ウツケ畑遺跡・三ツ溝遺跡・長田遺跡・大池添遺跡・竹ノ下遺跡・桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡』一般国道10号線豊前バイパス関

係埋蔵文化財調査報告第6集、福岡県教育委員会、一九七七）。行橋市下崎ヒガンデ遺跡は京都平野西部の山沿いに立地する。弥生時代中期から古墳時代前期の集落跡で、住居跡九〇軒以上・貯蔵穴三八基以上・建物跡三〇棟以上と甕棺墓三基が調査されている。貯蔵穴は中期後半の時期で、二〇基以上が一画に集中していることから、その管理は、それぞれの住居に個別にまかされるのではなく、集落全体として管理されていたことが想像されている。

以上のように、京築地域の中期の集落には個別の住居跡や建物跡にその集落の核となるものが出現する。また、食料の保管施設としての貯蔵穴の管理体制は多様化する傾向がうかがわれる。更に、この時期の集落では後期に向かって、住居跡の形態や食料の保管施設など各種施設が大きく変化していくが、その個別の現象については後述する。

後期の集落

後期の集落は前葉の時期ではまだ少ないが、中葉以降になると近年急速に調査例が増加してきている。そのなかでも大平村唐原地区遺跡群は九州内でも特筆すべき遺跡である。この遺跡は後期の環濠集落で、環濠とその内外で住居跡が多数発見されているほかに、小児用の墓地や水田跡も発見されている遺跡である。発掘は昭和六十二年（1987）から平成元年度に国道一〇号線豊前バイパス建設に先立って、郷ヶ原遺跡と上唐原遺跡の約一万八〇〇平方メートルの面積で実施された。その後圃場整備事業に伴って平成八年度から十五年度にかけては、田代遺跡・七社遺跡・塚畑遺跡・瀬戸口遺跡・太郎丸遺跡・下屋敷遺跡・久保畑遺跡・大法寺遺跡・田法寺遺跡など約六万六〇〇〇平方メートルの面積が調査された（図2-62）。当遺跡は山国川西岸の標高一六メートル前後の沖積地に立地し、主な環濠は三条確認されている。内側のA環濠は幅約四メートル・深さ一・五メートル前後の断面V字形の環濠、東西約五〇〇メートル・南北約三〇〇メートルの規模で、内部の面積は一二・四ヘクタールに達する。環濠はA環濠の

北西側でB・Cの二条が発見されていて、遺跡全体の面積は三〇ヘクタールと推定されている。この集落の後期の住居跡はA環濠内部で一〇〇軒以上、その外側でも二〇〇軒前後にのぼる。集落内では祭祀の場と考えられる方形や円形の周溝も六基確認されている。集落の北東側は谷状の低湿地となっていたが、ここでは水田跡が発見されている。個々の水田は幅二〇～三〇メートルの畦によって六メートルほどの方形に区画されていて、全体の面積は二〇〇〇平方メートルほどと推定されている。水田は他にも西側の河岸段丘裾部にあり、ここでは三～四四方の碁盤目状に区画された二万平方メートル前後に及ぶ広大な面積で営まれていた。墓地は集落内とは別の場所に設置されていたと考えられるが、小児用の墓地が集落外の北東から東側にかけて四か所で確認されている。合わせて三十数基あり、大部分が甕棺墓であった。このうち一基の石棺墓からはガラス玉四十数点が出土しており、首長層の家系に属する子どもが埋葬されていたと推定される。当遺跡の出土遺物では銅鏡片と山陰系の器台などが注目される。当遺跡の調査ではいくつか特筆される成果があげられた。人の一生の活動の主要な舞台である集落と水田と墓地がセットで確認されたことがその一つである。ここで生活していた人々の日常的な活動は、一～二ヘクタールのごく限られた範囲で済ませることができていたことがわかる。次に、出土する土器に瀬戸内沿岸や山陰地方のものが多数みられる点があげられる。これは当地域で山

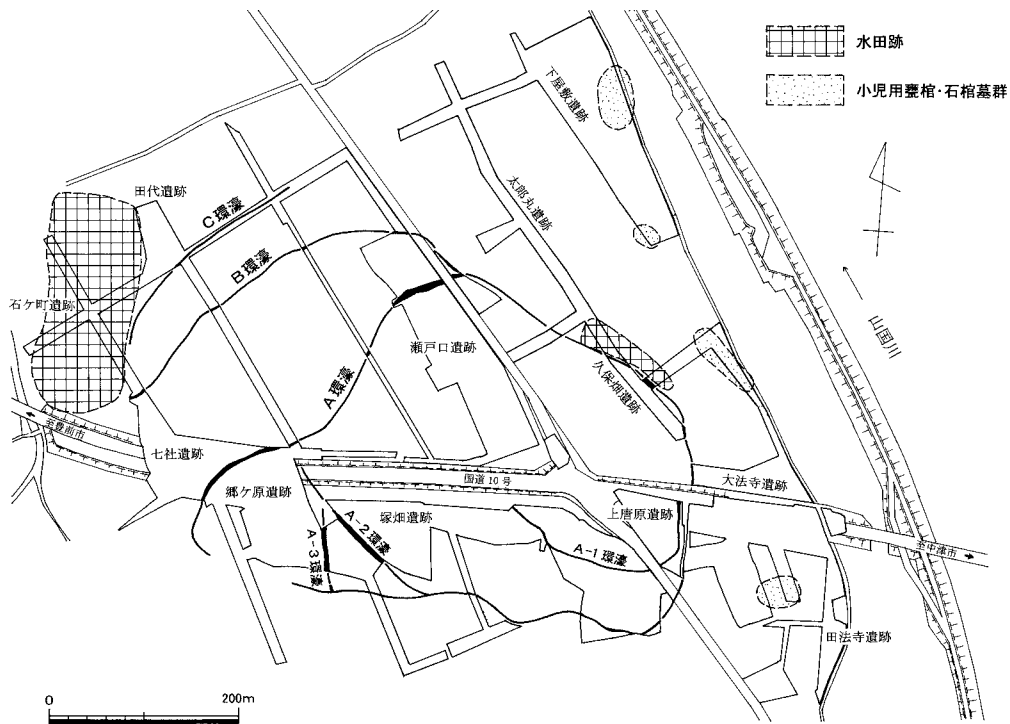


図2-62 唐原地区遺跡群主要施設配置図

国川を介した海運が発達し、これらの地域との交流が活発になっていったことを示すものである。更に、当遺跡の環濠集落の規模は佐賀県吉野ヶ里遺跡に匹敵するものであることから、山国川下流域には当集落を中心としてこの時期に一つのクニが存在した可能性も推定される。このクニを成立させた集団が、続く古墳時代初期になると西側の河岸段丘上に西方や能満寺の前方後円墳を築造していくこととなる（唐原地区遺跡群現地説明会資料、大平村教育委員会）。

築城町十双遺跡は城井川が下流の平野部に入って、流路を北東から東方に変える部分の南岸沖積地に立地する。城井川からは約五〇〇メートル離れていて、標高は三〇メートル程度である。検出された遺構は弥生時代後期中葉から古墳時代初頭にかけての集落を構成する住居跡三一軒と建物跡二棟である（図2-63）。なお、西方に隣接する赤幡森ヶ坪遺跡でも同時期の住居跡二軒が確認されている。この時期の住居跡の特徴であるベッド状遺構は一軒を除く三〇軒で検出され、屋内土壇も約八割に相当する二四軒で確認されている。また、主柱穴は四本のもものがわずか三軒で、二本のものが二四軒と圧倒的に多い。これらの住居跡からは在地の土器や吉備等の東部瀬戸内地方の土器以外にも多くの石器や鉄器が出土している。特に石庖丁は住居内からも多くと、他の遺跡に比べると多く出土している。鉄器は鉄鎌・鉄先などの農耕具、刀子・鉋などの工具有り、武器の鉄鏃は一〇

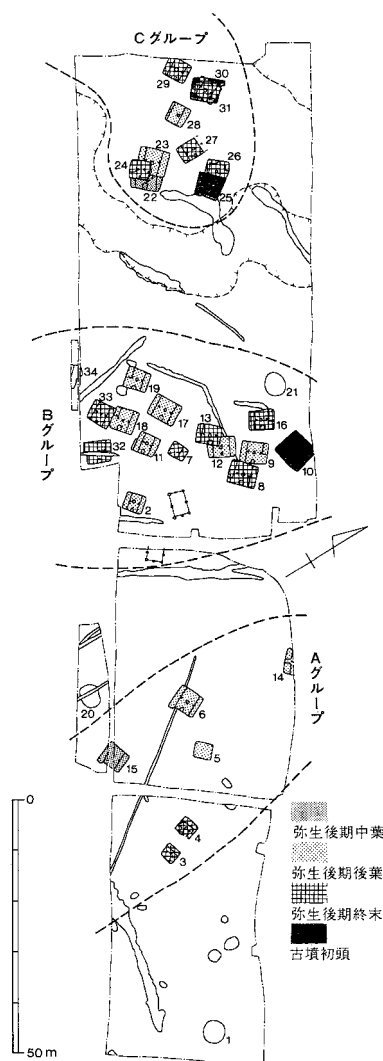


図2—63 十双遺跡の弥生時代住居跡変遷図

軒から出土している。これらの鉄器が出土した住居からは手入れ用の砥石が発見される例も多い。特に注目される遺物に朝鮮半島からの渡来品の銀製品と漢式土器があるが、これらについては後述する。これらの遺構や遺物から、当遺跡は城井川下流の沖積地を生産基盤とした水稻耕作に専業的に従事した中規模の集落であり、東部瀬戸内沿岸地方と交流を持ちながら争乱の時代を生き抜いたものと考えられる。また渡来品の存在は、朝鮮半島から直接もたらされたものか不明であるが、地域の拠点的な立場にある集落であったことを物語るものである（塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』8、福岡県教育委員会、一九九二）。

の南部で東西にのびる標高一七^{メートル}から二九^{メートル}程度の低い台地の北側斜面に立地している。発掘調査では弥生時代中期から古墳時代前期にかけての住居跡九三軒・貯蔵穴一五基・土壙二八基などが確認されている。各遺構の詳細については不明であるが、このうち弥生時代後期の住居跡は八〇軒程度と考えられる。その構造は十双遺跡と同様に内部にベッド状遺構・炉跡・屋内土壙などの施設を持つものが多く、柱穴の数は四本のものが多くなっている。出土遺物については石庖丁や鉄鏃とともに、近畿地方に多い手焙^{てあぶり}形土器がみられる。このように木ノ坪遺跡も十双遺跡と類似した水稻耕作を専業的に行った中規模の集落で、瀬戸内東端の近畿地方との交流がうかがえる。しかし、住居跡の密集度合いや出土土器からみて、その存続時期はやや下るものと考えられる。

このように京都平野の周縁部で、現在では水田になっているような低地に営まれた集落とは別に、当時の水田から離れた標高のやや高い台地や丘陵上など、中期の時期にしばしば選地されていた場所に再び営まれる後期の集落もある。

下稗田遺跡では先述したとおり、標高二〇^{メートル}から三〇^{メートル}の台地上に立地する集落で、弥生時代に水田に開発されていた

と推定される東西の平坦地には〇・五〜一^ミの距離がある。集落はこの台地上で弥生時代前期中葉から中期中葉まで営まれていたがいったん消滅し、後期中葉から古墳時代初頭に再建されている。調査された住居跡は合計七七軒で、集落の規模は中程度である。発見された遺物の中では初期の住居跡から鉄斧が四点と比較的多く出土していることは、当初の時期には山林となっていた台地の開発に精力が注がれたことを示している。また、石庖丁も三〇点以上出土していることから、水田経営が生産の大きな部分を占めていたと考えられる。土器の中では東部瀬戸内系のほかに中部九州の免田式土器が注目される。

行橋市矢留^{ヤレム}遺跡は京都平野南部に、南方からのびてきた標高三五〜四〇^ミの豊津丘陵上に立地する。当時水田となっていたと考えられる東部や北部の沖積地には直線で約一^ミの距離がある。後期から古墳時代初頭の住居跡は約二〇軒調査されている。石庖丁の出土からみて、他の集落と同様に水稻耕作を行った集落と考えられるが、比較的小規模な分村とみられる。

京築地域の ここまで京築地域の集落関係の主要遺跡を概観
集落の特徴 してきたが、全体を通していくつかの特徴を次に簡単にふれることとする。

弥生時代を通じて当地域の集落の盛衰を概観すると、前期前葉はごく少なく、中葉になるとやや増加してくる。集落の数がピークになるのは前期後葉から中期中葉にかけての時期であ

る。中期後葉から後期前葉は減少するが、後期中葉になるとまた増加傾向を示し、後期後葉から古墳時代初頭の時期は再び活況を呈するようになる。中期後葉から後期前葉の時期の激減は倭国大乱が最大の原因と考えられるが、この時期の落ち込みははなはだしく、従来の考古学的手法による土器編年に錯誤があることも考えられている。

当地域では弥生時代の初期から渡来人が定着し、稲作農耕が営まれていたことが、辻垣畠田・長通遺跡の出土土器や貯蔵穴の存在からうかがわれる。この時期から前期中葉ごろまでは葛川遺跡や神手遺跡のように環濠集落を形成するものもあるが、環濠によって保護されたのは人が住む住居ではなく、食料を保管する貯蔵穴であった。

住居跡の平面形は中期後葉を境に円形から方形に変化するが、これは他の地域と歩調を合わせている。平面形が楕円形の住居跡が一部でみられるが、時期はちょうどこの転換期のものが多い。ただし、炉の両側に小穴を有する松菊里型住居は中期の前葉まで残存する。

食料の保管施設も中期後葉を画期とし、貯蔵穴から高床倉庫へと変化する。貯蔵穴は相対的に京築地域北部では平面形が円形のもので大部分であるのに対し、南部では方形のものが卓越する傾向がある。直径一^ミ未満の小形の貯蔵穴は河川の中流域や山沿いに多く分布し、米とは別の食料の貯蔵や堅果類のアク

抜きに使用されたことも考えられている。

当地域における倉庫以外の掘立柱建物跡の出現は中期であるが、更に古い時期のものが今後発見される可能性がある。

当地域における拠点集落には前期後葉から中期前葉の時期の下稗田遺跡と後期の唐原地区遺跡群がある。それぞれ北部と南部を代表する遺跡であり、クニの存在をも考えさせる大規模な集落である。

二 墓地の変遷

京築地域の墓地の存続期間は、集落と対応するように前期から中期にかけては連続する場合が多いが、いったん断絶したのち後期後半に新たに出現する傾向がある。

前期・中期 京築地域のこの時期の墓地はほとんどが集団の**墓地** 共同墓地として設置されていて、特に有力な集団や個人専用の墓地はごく少ない。

行橋市長井遺跡は周防灘に面した長井海水浴場北端の海岸砂丘に立地し、縄文晩期の夜白式と板付Ⅰ式の土器が発見されている。当地域の弥生時代初頭を飾る遺跡であり、五〇〇基以上の箱式石棺墓と六基の甕棺墓が存在する大規模な墓地であったが、土取り工事によりほぼ消滅している。この墓地を営んだ人々の集落は確認されていないが、当遺跡は京都平野に定着した最初の渡来人の活動を語る重要な遺跡である。

下稗田遺跡では集落の内部に小児用の埋葬施設が六基作られているが、大部分の埋葬施設は集落の南北と西側にのびる丘陵上に設定された集団墓地に営まれている（写真2―18）。全体の内訳は石棺墓八基・石蓋土壙墓二二基・土壙墓一四五基・甕棺墓一〇八基で、合計二八三基にのぼる。また、三か所の集団墓地の周囲に連なる、計二七基の祭祀遺構には墓前祭祀に使用された土器などが捨てられていた。この墓地の特徴は甕棺墓が約三八%と高い割合を占め、その棺内の全長がすべて一二〇センチメートル以下のものであることがあげられる。甕棺墓以外でも小型の棺が目立ち、全長一二〇センチメートル以下の埋葬施設は墓地全体では約五九%に達しており、乳幼児の死亡率の高さを示している。もう一つの特徴として副葬品の少なさがあげられる。副葬品が出土した埋葬施設は全体で五基しかなく、その内容も勾玉や管玉などの玉類六六点と小型の石剣一本だけである。玉類が出土した埋葬施設は集落の北側の墓地に限定されており、この墓地に葬られた人々が他に比べてやや優越した立場にあった可能性はあるが、全体としては集落内に大きな身分的格差は認められない。

この傾向は前期から中期の時期では当地域の他の墓地でも一般的にみられる現象である。また、集団墓地内では各埋葬施設が列をなして規則的に配置されているが、これも北部九州の同時期の墓地に共通する特徴である。

行橋市前田山遺跡は前田大池をはさんで下稗田遺跡の北東側